

## 女たちの避難所

写真は垣谷美雨『女たちの避難所』新潮文庫。大阪市大図書館に通う地下鉄で読んだ。本に引き込まれ、つい乗り過ごすことも。本書カバー裏から一九死に一生を得た福子は津波から助けた少年と、乳飲み子を抱えた遠乃は舅や義兄と、息子とはぐれたシングルマザーの渚は一人、避難所に向かった。だが、そこは“絆”を盾に段ボールの仕切りも使わせない監視社会。男尊女卑が蔓延り、美しい遠乃は好奇の目の中、授乳もままならなかった。やがて虐げられた女たちは静かに怒り、立ち上がる。憤りで読む手が止まらぬ衝撃の震災小説。『避難所』解題。



震災のあと、数多くの震災・原発関係の本や雑誌を読み、映像を見てきた。避難所をテーマにした「震災小説」は初めである。3人の女性を主人公に、日本社会の現実にも光をあてる。小説の中身より、ジャーナリスト・竹信三恵子さんの「解説」を一部紹介したい。

震災は、男女平等を明記した憲法を持ち、「男女共同参画」へ向けて政府も旗を振ってきたはずの私たちの社会の実相を、はからずも浮かび上がらせたのだった。

この小説は、そうした被災女性たちの姿を、年代の異なる三人の女性の被災体験を通じて照らし出す。被災当日、避難所暮らし、そして、仮設住宅へと移っていく彼女たちの体験のひとつひとつは、私たちがあの日以降、現場で見てきたものそのままだ。それらが、フィクションの中での架空の女性たちの思いを通じて、ドキュメンタリー以上にリアルに迫ってくる。

そんな三人の被災体験が浮き彫りにするのは、日本という社会での「女性の居場所のなさ」だ。女性の踏ん張りに、のしかかるように依存してくる「夫」「舅」という名の男性たち。これにやりきれなさを抱きながら、正攻法に拒否すれば、女性たちは、共同体の中での住むべき位置を失う。にもかかわらず、「みんな大変なんだから」と、女性同士が牽制し合って不満を抑え込み、「我慢」することでかろうじてなりたっていく共同体の息苦しさが、そこにある。

そうした生きづらさは、一見、大震災のせいであるかのように見える。でも、考えてみたら、それは震災前からずっとあったものではなかったか。震災は、人々が懸命に隠し通してきたそうした裂け目を、地割れとともに明るみに出したにすぎないのではないか。ヒロインたちの会話の中では、「あの震災で何もかも変わってしまった」という福子の感慨に対し、遠乃が「そういうのって、震災や津波と関係ねえと思いますけど」「男尊女卑も震災前からそうでした」と言い返す。その言葉に私たちは立ち止り、息を飲む。そう、震災前から、そうだったんだよね。と。

(2019年11月5日)